

ラグ・ヴィラ (Raghu Vira) 博士の 中国旅行記 (試訳 1)

三宅伸一郎 / DASH Shobha Rani

本稿は、20世紀前半のインドを代表する東洋学者にして政治家でもあるラグ・ヴィラ (Raghu Vira) 博士のヒンディー語による中国旅行記

Raghu Vira, *Prof. Raghuvira's Expedition to China*. (Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 76), Lokesh Chandra & S. D. Singhal (eds.), New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1969.

の試訳の一部である。

1902年に西パンジャブのラーワルピンディー (Rawalpindi) に生まれたラグ・ヴィラ博士は、パンジャブ大学で修士号を取得後、ロンドン大学で *Kaṣiṣṭhala-Katha Samhitā* の研究で Ph.D. を、1928年にはオランダのユトレヒト大学 (Universiteit Utrecht) でカーラント (Caland) 博士の指導のもと *Vārāha Grhya-sūtra* の研究をおこない D.Litt. を取得した。インド帰国後、ラホールにある Sanatan Dharma College のサンスクリット学部の部長となり、ヴェーダ文献の出版でその名を知られるようになった。1932年にラホール近郊の Ichhra に、International Academy of Indian Studies を創設した。彼の研究活動の拠点となり、後に Śatapiṭaka Series を出版することになるこの研究所は、1946年にはナーグプル (Nagpur) に、インド独立後の1956年にはニューデリーに移転した。

彼の研究の方向性は、アジア諸地域に残る古い文献を収集・保管し、それぞれの地域に存在するインド文化の要素を研究することによって、インド文化をアジア文化の師匠として位置づけるというものである。この目的を達成するために彼は、中国、モンゴル、東南アジアなどアジア各地を旅行した。1952年にはインドネシアを訪問し、古ジャワ語やバリ語で書かれた貝葉写本やその写真

を持ち帰った。1955年には中国政府の招待を受け、4月20日にインドを出発し香港に入り、広州を経由して北京に向かい、その後、内モンゴル、敦煌、青海省などを含む中国各地を3ヶ月に渡り旅行した。その間、当時の中国首相であった周恩来とも会見し「インドの玄奘」と賞賛され、スムパ・ケンポ (Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor, 1704-1788) 全集やモンゴル大蔵経カンジュル (108巻) を含む300箱にもおよぶ中国語・チベット語・モンゴル語によるさまざまな分野の文献の寄贈を受け、それらをインドに持ち帰った。中国からの帰途には、ビルマ、マレーシア、スリランカを訪問し、そこでも文献の収集をおこなった。中国からの帰国後、ソ連政府からの招待を受け、2ヶ月間滞在、シベリヤやブリヤートを訪問し、レニングラードの科学アカデミーからは膨大な量のモンゴル木版本のマイクロフィルムを入手した。その後、モンゴル国を訪問、チベット大蔵経ウルガ版カンギュル (105巻) の実物とモンゴル大蔵経タンジュル (226巻) のマイクロフィルムを入手した。こうして入手された文献やマイクロフィルムなどは、すべて彼の研究所である International Academy of Indian Studies に所蔵され、それらの一部は Śatapitaka Series として複製出版された。このように彼は、当時アクセスが困難であった中国やモンゴル、ソ連を旅し、それらの国から貴重なチベット語やモンゴル語の文献を (実物でなくともマイクロフィルムの形で) 持ち帰り、それを出版という形で世界中の研究者に公開した。

今回その試訳の一部を示す *Prof. Raghuvira's Expedition to China* (以下本書) は、ラグ・ヴィラ博士の1955年4月から3ヶ月に及ぶ中国旅行時の日記であり、1955年当時の中国の文化や社会の様子を知る上で重要な資料であることは言うまでもない。とりわけ彼は、各地の仏教寺院を精力的に訪問しており、本書の中で、訪問した寺院の堂宇内部の尊像の配置や勤行の様子などを克明に記録している。周知のとおり、中国国内の仏教寺院は、1960年代後半からの10年にわたる文化大革命により大きな打撃を受けた。文化大革命直前の中国の宗教状況 (例えば寺院の状況など) を知る上で貴重な情報を与えてくれるという意味において、本書は重要である。

玄奘や法顕らインドを訪問した中国の求法僧たちの旅行記は存在しているものの、時代が異なるとはいえ、インド知識人の視点から見た中国の記録は、管見の及ぶ限り唯一のものである。彼は周恩来をはじめとする政府要人から研究者、寺院の僧侶から参詣におとずれた信者にいたるまであらゆる階層の人々と

交流しており、本書にはその際の印象がきわめて細かい筆致で生き生きと描かれている。現代インド知識人の異文化体験の記録であり、異文化コミュニケーションを研究する上でも恰好の材料となるであろう。

また彼は、中国からの帰国後、中国の拡大主義的傾向を指摘し、ネルーの対中国友好政策を批判し、ヒンドゥー・ナショナリスト政党・野党 Jana Sangh に加盟した。中国訪問は、彼の政治的立場の大転換点であった。彼がなぜそのような考えを持つに至ったのかを解く鍵が、本書にあると考えられる。

以上のように本書は、文化大革命直前の中国の宗教状況を知る上でも、また、現代インド・中国関係史を繙く上でも、貴重な資料であるにもかかわらず、ヒンディー語で書かれているため、Śatapiṭaka Series というアジアの宗教や文化を研究する者たちによく知られたシリーズの1冊として刊行されているにもかかわらず、これまで注目されることはなかった。翻訳はもちろん、本書に言及した研究は、管見の及ぶ限り存在しない。

そこで、この貴重な資料である本書の内容を内外の研究者に提供すべく、和訳の作成をおこなうこととし、2012年度大谷大学真宗総合研究所一般研究（共同研究）として、三宅とヒンディー語のネイティブ・スピーカー DASH Shobha Rani と共同で、定期的に読み合わせをおこない。以下の3つの部分について和訳草稿を完成させた。

1. インドを出発し広州を經由し北京に到着するまでの記録（pp. 1-13：～1955年4月27日）
2. 甘粛省の省都・蘭州から青海省の省都・西寧を経て同省最大のチベット仏教寺院クンブム寺（Kun 'bum、塔爾寺）を訪問した後、西安を訪問するまでの記録（pp. 90-97：6月7日～14日 *クンブム寺については、各堂宇ごとに、安置されている尊像等の様子が詳細に記述されている。また、クンブム寺では、青海省でのチベット語ラジオ局の開設に尽力した教育家スラブ・ギャツォ（gSung rab rgya mtsho）氏が案内の任にあたっていたことが記述されている）
3. 内モンゴル訪問時の記録（pp. 47-51：5月20日～22日 *内モンゴルでは、フフホトのシレート・ジョー（席力図召）、フフホト郊外の法禪寺および Ta-chao-vū-lyāng-ssa の3ヶ寺を訪問したことが記述されている）

今回試訳を示すのは、そのうち1の一部である。中国訪問にいたる経緯および広州の様子、とりわけ六榕寺の様子が克明に記述されている。

* * *

翻訳は、ヒンディー語原文を DASH Shobha Rani が読みながら口頭で訳を述べ、それを聞きながら三宅が日本語としての体裁を調べた上で下訳を作成し、それを再度原文と照らし合わせながら二人で確認するという形でおこなった。

本書の読解および翻訳にあたっては、いくつかの困難があった。1つは、固有名詞の同定である。当然のことながら本書の本文には、数多くの中国の地名・人名が現れているが、デーヴァナーガリー文字による音写のみであり、漢字による表記はない。また、本書には多数の写真が収録されており、それぞれにキャプションが付されているものの、ヒンディー語と英語によるもののみであり、これにも漢字による表記はない。こうした漢字表記の欠如は、中国の人名・地名など固有名詞の同定に困難をもたらした。今回、中国・北京にある中国藏学研究中心の李学竹氏の紹介により、同研究中心の研究員・鄧銳齡氏の協力を得て、写真のキャプションに現れている地名・人名などの固有名詞については、そのほとんどの漢字表記を知ることができた。これにより、本文中に登場する固有名詞の大部分の同定を果たすことができたが、なお同定できない部分について、今回の試訳では、デーヴァナーガリー文字による音写をそのままローマ字転写して示した。

もう一つは、サンスクリット語の語彙の使用である。すなわち、いくつかの単語について、通常用いられるヒンディー語のものでなく、サンスクリット語のものが使用されている。たとえば(以下に示すヒンディー語は、デーヴァナーガリー文字表記をそのままローマ字転写したもので、発音を写したのではない)：

肺

ヒンディー語：phephadā

サンスクリット語：phupphusa

市場

ヒンディー語：hatiyā

サンスクリット語：hattī

駅

ヒンディー語：steśana

サンスクリット語：sthātra

のようにである。これが、1950年代のヒンディー語の特徴なのか、それとも著者個人の特徴によるものなのか、今後の検討を要す。

* * *

翻訳作業の過程で、本書の著者ラグ・ヴィラ博士の子息であるロケシュ・チャンドラ (Lockesh Chandra) 博士と連絡をとることができた。ロケシュ・チャンドラ博士からは、われわれの研究に対する激励と、将来の和訳刊行に対する理解を示す書簡をいただいた。また、本書の書誌的情報に対する瑣末な疑問に対しても、丁寧な回答を寄せてくれた。すなわち、

- ・本書の扉に「part one」との記述があるが、「part one」のみで、続巻は執筆されていない。
- ・本書の扉の裏に「printed in 1956, published in 1969」とある。これは、1956年に International Academy of Indian Studies がナグプルからニューデリーに移転する前、印刷 (printed) され、ラグ・ヴィラ博士没後の1969年に Śatapiṭaka Series の一冊として刊行されたことを意味する。刊行はこの一回だけである。

さらに、ラグ・ヴィラ博士の伝記の有無をお尋ねしたところ、存在しないとの回答をいただいたが、International Academy of Indian Studies のニルマラ・シャルマ (Nirmala Sharma) 教授を通じ、ラグ・ヴィラ博士の事績に関する貴重な資料を送付していただいた。ロケシュ・チャンドラ博士およびニルマラ・シャルマ教授の両氏に深い感謝の意を表したい。

参考文献

Raghuvira-Śraddhāñjali: Homage to Prof. Dr. Raghu Vira. (Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 35), New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1965. (ラグ・ヴィラ博士の追悼文集。本書に収録されている V. S. Agrawala, "He was an Institution of Vast Magnitude.", pp. 35-40には、彼の生

涯が要領よくまとめられている)

Raghu Vira, *India and Asia : a Cultural Symphony: a Collection of Some Notes, Articles, Poems, and Letters of the Late Prof. Dr. Raghuvira*. (Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 240), New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1978. (ラグ・ヴィラ博士によるアジア各地の文化に関する短い論文やエッセイをまとめたもの。“Indo-Asian Literatures: Śatapiṭaka.”, pp. 230-240には、Śatapiṭaka Series の全体構想が述べられている)

Denis Sinor (ed.), *Studies in South, East, and Central Asia Presented as a Memorial Volume to the Late Professor Raghu Vira*. (Śatapiṭaka Series Indo-Asian Literatures, vol. 74), New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1968. (pp. xix-xxxi にラグ・ヴィラ博士の著作一覧が掲載されている)

試 訳

[p.1] ある朝のことでした。私が国会へ行こうとしていた時、中国大使館の So Van Pit 氏¹から電話がきた。「今日、会いに来ていただければ、たいへんありがたいです」。私は国会の会議室から戻って来て、午後、So Van Pit 氏に会いに行った。彼は、中国政府の教育部 (Academia Sinica) から送られて来た手紙を見せた。手紙は中国語で書いてあった。たった1行であった。「教育部はラグ・ヴィラ教授を6週間の中国訪問に招待します」。

数ヶ月前からずっと私は、中国語の科学用語の単語集に関して中国政府と手紙のやりとりをしていた。科学用語について中国とインドは、基本的に同じ問題を抱えている。中国人は、今世紀(20世紀)初頭から、この問題について著しい進歩を遂げている。pencil、motor、rail、biscuit、chocolate、police、radioなどの単語に対して、彼らは、中国語として新しく作られた単語を使用していた。

招待状はこの手紙のやり取りの結果であった。その頃私は、デリーに研究のために新しい事務室を設けていた。国会議員たちのために、国会の活動方針に関する200から250ページの本をすでに書き始めていた。あらゆるところから資料が集まっていた。中国へ行くということは、この仕事の休止を意味するので、それを考えると、すこし不満であった。しかし、中国とインドとの古い関係、そして新しい関係——これらの方が魅力的であり、国会の活動方針に関する本を書くよりも大切だと確信し、この招待を承諾した。そして、ネルー首相と相談し、自分の中国訪問の計画を中国政府に送った。

私は海路で行こうと考えていた。しかし、船での旅は時間がかかるので、北京の5月1日の祭り [=メーデー] が見れない。So Van Pit 氏は、私とその祭りに参加することを熱望していた。共産主義中国の希望は何か、目的は何か、そしてそれらを完成させるために、毛沢東と彼の同志たちは国の発展のためにどのような仕事をしているのか、国民はどのような熱意と努力によって新しい社会の建設に邁進しているか——それらを見る機会を失うべきではない。そこで、海路での訪問計画を変更し、空路での訪問に決定した。

[p.2] 中国では好奇心をかきたてられることが多くなるだろうから、毎日の

出来事を毎日書き残しておかなければ、後で、たくさんの小さいが重要なことを思い出せなくなってしまう。図書館、寺院、教育機関、工場労働者・女性・子どもたちのための施設などに行く際には、同行者が必要である。政治・文化・経済に関わる会話の際には、速記者が役にたつ。中国においてすべての場所とすべての仕事において、中国語が唯一の言語として使用される。それゆえ、同行者や速記者が中国語を書くことができれば最良である。中国語の単語をローマ字もしくはデーヴァナーガリー文字で書くのはあまり意味がない。書いてある単語のほとんどが発音どおりではなく、意味に基づいていることが、中国語の特徴である [=中国語の文字・漢字は表音文字でなく表意文字である]。インドの数字はこのような状況のいい例である。ヒンディー語とパンジャービー語の双方において、3 (३) という数字は同じように書かれる。これは意味を表しているもので、発音を表しているのではない。それゆえ、この文字の意味は、ヒンディー語とパンジャービー語の双方において同じである。しかし、もし発音どおりに書けば、パンジャービー語で「traī」と書き、ヒンディー語では「tīn」と書く。

仏教を知っていること、そしてサンスクリット語を知っていることも、同行者・速記者に必要であった。

私の娘スダルシャナー (Sudarśanā) は、3月27日に大学の卒業試験を終えていた。彼女は手が空いていた。研究に使用されるほとんどの単語を知っていた。サンスクリット語のカーヴィヤティールタ (Kāvya²tīrtha) の称号を得ていた。彼女は中国語と日本語の勉強も始めていた。私は彼女を自分の旅の同行者にすることを申請した。

デリーからナグプルに行った。そこで2、3日宿泊し、旅の準備をした。旅の初期費用をネルー首相が援助してくれた。私が著した『英語・ヒンディー語大辞典 (Brhat-Āṅgal-Hindī Koṣa)』(政治・科学・商業に関する15万以上の単語・複合語および慣用句を収録) およびその他の科学的・文化的著作を持って行った。中国では古い光景を目にすることだろう。それらを永遠に自分の記憶にとどめておくことは、不可能であるが、もちろん必要になるだろう。それゆえ、自分の記憶を助けるために、そして他の友人たちのために、私は、4台のカメラを持って行った。1台は動画のために。もう1台は特別に古い美術品を再現するために。残りの2台は普通の白黒とカラー写真のために。インド音楽の例とし

で30~40枚のレコードを持って行った。インドがここ数年でどれぐらい経済的發展を遂げたかということを示すために、4~5本の映画も持って行った。

[p.3] 音楽と産業の發展を示すこれらの音声と映像は、ケースカル (Keskar) 氏からの寄贈であった。

4月17日の朝、私たちはデリーを出発した。20日にカルカッタから飛行機で8~9時間かけて、中国の外にある中国、香港に到着した。ここには、我々を歓迎するために、中国政府の代表者が来ていた。

香港島とその隣にある九龍島は、中国の領土であるが、これまで中国政府は返還要求をしていない。ここで、イギリス政府は、はばかりことなく統治をおこなっている。政治的な状態が安定するまで、中国は香港の返還要求をしないだろうと、私は信じている。世界中の品物は、香港という門を通じて中国に入り、必要に応じて外に出て行く。

「カラーフィルムを中国で手に入れることはできない。香港でインドよりも安く手に入れることができる」と私たちはデリーにいる時に聞いていた。そこで、私たちは香港で、フィルムとその他の機材を購入した。

23日の朝、車で北京に向けて出発した。40~50マイル走ると、中国との国境に至った。そこで列車に乗り換えた。中国政府の役人が歓迎のためにやって来た。彼とともに通訳の女性もいた。

4月23日午後1時から7月26日午後3時まで、つまり、私たちがまたここに戻ってくるまで、通訳と、誰かしら政府の役人が1日も離れることなく私たちと一緒にいた。

政府の役人が一緒であったため、税関は私たちに質問をしなかったし、私たちの荷物を開けなかった。

午後2時に中国の列車に乗った。座席につくやいなや、大きな声で共産主義の歌が聞こえて来た。列車の各車両にこの歌が聞こえてくる。

我々は、いくつもの車両を観察して回った。そして最後に小さな部屋にたどりついた。そこには、一人の女性が座っていて、グラムフォンのレコードをかけていた。乗客たちに、何かを知らせる必要があれば、それをするのも彼女の仕事であった。最初、この歌が気に入った。新しさがあったため、好奇心をかきたてられた。しかし、しばらくすると、その高音によって耳が痛くなった。少しの間を取りながら、この歌は数時間も流れ続けた。

列車には清潔さが、念入りに準備されている。1日に8回から10回、人が掃除しに来る。菌が増えないように、殺菌剤の使用が多い。共産主義 [p.4] 政府は、国民の健康のために努力している。しかし、国は巨大である。人口も多い。回復するまでまだ何年もかかる。

中国の列車には、お茶とお湯の準備が常にしてある。乗客は、車両に入り座席につくや否や、緑茶の小さなパックとコップをもらう。コップのお湯が尽きると、人が来てまた新しいお湯を入れてくれる。一日に10~15回、コップは満たされる。しかし、お茶の葉は足されない。

列車の両側に私たちは中国の山・畑などを見ることができた。4月は乾期なので、緑はあまり多くなかった。そうとう遠いところまで、土の色は白かった。

5、6時間ゆっくりと走って、列車は広州に到着した。医学校の校長とその他の政府の役人たちが、歓迎のため駅にやって来た。そして私たちを15階にあるホテルに連れて行った。このホテルは、珠江の川岸に位置していた。目が届くがぎりの遠いところまで、さまざまな小舟が浮かんでいた。これらの小舟は、住居と商店の二つの目的のために使われる。何千人もの中国人の水上生活者は、これらの小舟で人生を過ごす。ここで彼らは生まれ、ここで彼らは死ぬ。そして、これらの小舟は彼らの職業でもある。「共産主義政府が樹立される以前、これらの水上生活者たちは陸に住んでいる人たちとの婚姻が許されていなかった」。私たちの通訳はそのように教えてくれた。それだけでなく、彼らには何の政治的権利もなかった。彼らには陸に家を建てて住む権利もなかった。私たちの通訳のこの話がどれほど真実にもとづいているのか、それを突き止めるために十分な時間と機会を、我々は得ることができなかった。夜、何千もの灯明の反射光のような長い光の柱が、水の上でとても美しく輝いていた。もし、1艘の小舟の前を別の小舟が横切ろうとすると、自分の機械の言葉「ピーピーピー」と声を上げて横切ろうとする小舟をどかさうとする。小舟が多すぎるため、そんな命令が他の小舟からも次々と繰り返されていた。このようにして、2~4分、「ピーピーピー」の連続した花輪ができる。

1955年4月24日

共産主義の時代に入ってから広州に造られた場所を見学することが、前夜決まった。例外として、唯一の仏教僧院〔への訪問〕が予定に入った。

最初、朝9時に街の有名な競技場へ行った。この競技場は8ヶ月の努力によって造られたものであった。5万人を収容することができる。中央にサッカー競技場があり、その周りには7、8レーンからなるトラックがあった。[p.5] 何人かの一般市民が朝晩やって来て運動している。5月1日の大衆集会もここでおこなわれる。この場所の上に珍しい物を置くホール³があった。前はここにお寺があった。先史時代から毛沢東の時代までの文物がここに置かれている。博物館の入り口には、分厚い木製の白い文字で造られた「国の財産は国の文化である。人民はこれらの文化財を守るべきである」という市民に対する毛沢東主席の訓示が掲げられていた。

1500年前インドからやって来た1体の素晴らしい仏像もある。最も不思議なものは、時間を計るための容器である。上の容器から水が下の容器にノズル⁴を通じて落ちる。このように、2つめの容器の水は3つ目に、3つ目の容器の水は4つ目の容器に落ちる。4つ目の容器に2つの板が立てられていた。1つは金属製で、もう1つは木製であった。水が増えると、木材の板が上に浮きあがる。そして、金属製の板に付けられた印によって、何時になったかがわかるようになっていた。金属製の板には12の印が付いていた。古代中国では、一日を12に分けていた。

近くに国の父・孫中山〔孫文〕の高い記念碑があった。我々はそのに行った。人々は我々を四方から囲んだ。彼らのうつろな目を友好的にするため、我々は彼らと話しはじめた。子どもと大人みんなの名前を聞いて、それをヒンディー語で書いて与えた。彼らはそれを、驚いて大きくなった目で見受け取った。少し前まで、「外国人だ」という気持ちで満たされていたその顔は、今や友情と愛情で満たされていた。外国へ行き、人民が人民と直接交流することが、とても必要である。

ソーダ水の代わりに豆乳が用いられていた。16指ほどにカットされたサトウキビも売られていた。我々はもらいたかったが、得られなかった。その理由は「味が薄いから」ということであった。

列車の時刻表を入手するために努力したが、どこにも見当たらなかったし、手に入れることもできなかった。その理由は「列車の数が非常に少なく、時間どおりであるため、人民は時刻表を必要としていない」からであると教えられた。信じることはできなかったが、納得せざるを得なかった。

12時に儒教の廟を訪問した。1924年にこの廟は革命家たちの訓練施設に変えられていた。1924年から1927年まで、毛沢東、周恩来および彼らの友人たちが、この廟で革命の指導者を育てた。農民革命の基盤がここで築かれた⁵。

廟は大きく、見るべきものであった。今この廟は、記念館としてのみ使用されている。[p.6] 毛沢東の執務室、彼の椅子と収納箱 (patal)、寝るための木製のベッド、ペンとインク壺、これらはガンディーの遺品を思い出させる。このようなシンプルな生活でも毛沢東は、火を焚くことができていた。

1つの部屋に兵士たちの服、もう1つの大きな部屋に学生が座るための簡易ベンチがあった。部屋の外に、樹齢は100年だが小さくて小人のようなパイン系統の木が、鉢に植えられていた。出口に至る直前に、人口の池があった。このような人工的な池は他の場所でも見ることができた。

革命のために何千もの生命が捧げられた。広州は革命の故郷である。ここに72人の英雄たちの記念碑がある⁶。

諸々の記念碑の訪問後、我々は、真昼の強い日差しの中で、政府の百貨店にやって来た。ここは、5、6階ある高い建物であった。大小様々な物をここで手に入れることができる。今日は非常に混んでいた。我々は、自分たちの散らかっている物を持って行けるように、1つの網 (jalā⁷) を買った。スダルシャナーは人形を買いたがったが、それ (人形) を見てとても失望した。なぜならそれらはすべて西洋風の人形だったからである。そこに中国風の人形は1つもなかった。象牙のものはきれいであった。品物の値段は高かった。インドのおおよそ倍であった。

現代中国では、おおきな商業と市場は政府が握っていた。小さな商業は人民の手にあった。今日、人民と政府の間の境界がどこにあるのかを尋ねたが、詳しく知ることはできなかった。

昼食後我々は、孫中山の記念館⁸を見学した。これは1927年から1931年の間に造られた。中の建物は八角形になっていた。ここに5000人の人民が座れるよう、椅子が設置されていた。インドの舞踊団の舞踊も、[以前] この建物でおこなわれた。

6つの菩提樹のある寺 [六榕寺]

入り口のところで午後4時に Kwang Ming に出迎えられた。住職の Chwao

Chin は数ヶ月前から肺の病気に苛まれていたため、外の入り口まで出迎えに来ることができなかった。寺院は7階建てであった。1414年前に建立された。日本人が三蔵すべてを寄贈していることから、この寺院がどれほど有名であるかが推測できであろう。

1000年前、何人かのインド人僧侶 (paṇḍita) がブツダガヤから菩提樹の苗を持って来た。[p.7] その木の種からできた古い菩提樹がこの寺院にある。

寺院は1400年前のものには見えなかったが、最上階に付けられた金属製の柱はすくなくとも非常に古いものに見受けられる。数百年間この柱は常に雨と日差しと風に耐えている。この柱の上部に彫られていた小さな仏像は風化している。金属製の柱の上の屋根には、悉曇文字でいくつかのダラニが書かれている。僧侶は悉曇文字が読めない。寺院の中庭には、小さな最高の石 (rājāśma⁹) でできた柱が立てられている。これはダラニ柱と言われている。この柱の四方にダラニが書かれている。各悉曇文字の近くには漢字による発音が記されていた。

仏舎利が納められている7階建ての仏塔にある88カ所のうち、中国製の塑像が置かれていたのは7カ所のみで、他〔の場所の塑像〕はなくなっていた。私が、それらの塑像がどこに行ったのかを尋ねると、「反対勢力である国民党の人々が持ち去り壊してしまった」という答えであった。僧侶は悲しい表情を浮かべた。それは、目の前にその時の場面が蘇ったからのように見えた。その光景を思い出した悲しみにより、彼は無言のまま70~80段の階段を降りて行った。

階段は全部で153段ある。これは街の中で最も高い建物である。上に登ると冷たい風に吹かれ、周囲の景色が見える。4つの特筆すべき建物が見える。これらの建物の屋根は、中国の土を焼いた青または朱色の瓦でできている。これらの瓦は立派な建物の屋根にしか使われない。1つは中山記念堂である。この建物の屋根の隅には鈴がぶら下がっている。しかしそれらは、とても大きく重いので、風が吹いても音がしない。2つ目の建物は、政府の事務所である。3番目は壺の形をしている街の水道局である。

仏舎利の納められた仏塔のあるこのお寺には、様々な部署がある。昔、ここは無数の富を持っていただろう。今は僧侶が4人しかおらず、夕方6時の勤行の際には、3人の優婆塞と30~40人の訪問客しかいなかった。その〔訪問客の〕中の数人は、私たちのために動員されたのかもしれない。勤行の場面は、信仰 (śraddhā) と信愛 (bhakti) にあふれていた。住職はダラニを唱えていた。中国

語の翻訳も少し含まれていた。「ナモ」の言葉以外、サンスクリット語と中国語の区別を聞き取ることができなかった。跪くための小さな板がそれぞれの僧侶の前に置かれていた。木の固さで膝を痛めないように、その板の上にはクッションが置かれていた。僧侶は打楽器を使っていた。2つの楽器は木製で、別の2つは真鍮製であった。1つは小さな鍋のような形であった。各ダラニ〔の読誦〕が終了すると、それを知らせるために、その〔鍋のような楽器の〕縁を棒で叩く。もう1つの真鍮製の楽器は、じゃがいものように丸いものであった。

[p.8] 中は空洞になっていて、真ん中は割れていた。この上を棒で叩くと、美しい音が出ていた。その他の2つの木製の楽器のうち、1つは大きく、もう1つは小さかった。小さい方は普通のボールほどの大きさであった。形は丸いが、持つための耳のような形をした握りが付いていて、その握りの反対側の丸い部分は割れていた。この上を棒で叩くと、十分な音がしていた。もう1つの大きい方もボールの形をしていて、木製のテーブルの上に置いてあった。手で持つことは不可能であった。上は叩き続けられた結果、皮がめくれていた。木製の2つの楽器の名前を「カースタミン (kaṣṭhamīna)」つまり木製の魚〔=木魚〕という。これらの四つの楽器は〔勤行中〕常に叩き続けられてはいなかった。リズムを取るため、あるいは、終わりを示すために使われていた。少しの間隔を空けて、1、2度ほど叩かれていた。勤行が終わると、住職は階段を昇って、2本の木製の棒で4、5分 (kalā¹⁰) 太鼓を叩き続けた。香や灯明などによる供養は、我々が訪問する前に終わってしまっていた。

寺院では毎日2回供養がおこなわれる。朝は午前4時30分で、夕方は午後6時である。朝の勤行の際に数多くの優婆塞が集まる。集まりを見ると、多く見積もって20人ほどの優婆塞が来ているものと推測される。

供養場に入ると、まず、笑顔の大きなおなかをした像が見える。これは有名な弥勒仏、すなわち未来の弥勒である。前に進むと、お香に火を着けるための6、7フィートほどの高さの香炉が作られていた。供養場には3体の本尊が祀られている。3体とも金が塗られている。これらの前に「観音」つまり Avalokiteśvari¹¹が安置されている。両側に合掌している2人の優婆塞が立っている。そしてもう少し進んだところの壁際に十八羅漢の像が安置されている。十八羅漢は九体ずつ両側に置かれている。これらの像の素晴らしい輝き、そして顔の表情、服装、身体の曲線すべてが研究に値する。中国とインドの美術の

合流は、あらゆるところにはっきりと現れている。

我々は10セントのお香を手にとった。お香は18本ほどあったと思う。お香の灰の入った器が置いてあった。この柔らかい灰の中に1本ずつ、すべてのお香を立てた。お香には灯明の火であらかじめ火を着けていた。灯明にはピーナッツの油が使用される。灯明だけでなく食事にも〔ピーナッツの油〕使われる。中国から植物性バターの使用がはじまった。

私たちは、僧侶に悉曇文字について話を始めた。彼は、自分が毎日勤行に使う本を持って来た。この本に書かれている悉曇文字は数が少なく、本のすべてのところに漢字でダラニが記されていた。この本は上海で出版されたものであった。

僧侶には3人の弟子がいる。彼らは、勤行の方法などを勉強中である。

[p.9] 我々がお願いすると、僧侶はプリントしてある写真を持って来させた。たった3枚の写真だった。我々は、3枚まとめて3.5円で購入した。1枚の写真には約22人の人たちがいて、その中の18人は阿羅漢である。

この僧侶は14歳の時に比丘になった。未婚のままである。彼は、喜んで我々とともに陽のあたる場所に立ち、カラー写真を撮らせた。そして自分の芳名録に私たちの住所と名前を書かせた。我々より前、ハリンドラ・チャットパディヤーヤ (Harindra Chattopadhyay) 師¹²がすでにここをご訪問されている。彼は自分の名前をベンガル語とローマ字で書いていた。他にも2、3人のインド人の名前があった。「インドへ巡礼のために来たいですか」と尋ねると、その僧侶は、笑みを浮かべながらこう言った。「その日は、私の人生にとって、もっとも聖なる日になるでしょう」と。しかし、そう言うや否や、それが不可能であることを悟って、絶望の表情を浮かべた。インドと中国の昔からの愛情を保つておくために、インド側が費用を出し、毎年積尊の誕生日と涅槃の日に、400から500の中国の僧侶と優婆塞にインドへの巡礼の旅をさせることは、インド人とインド政府の義務である。政治家たちのためにするのと同じように、彼らの歓迎と宿泊のためにもまた十分な手配がなされるべきである。同時に、〔中国の〕仏教僧院・寺院・石窟を旅行するため、インド人観光グループも毎年中国に来るべきである。

写真などを見せて、僧侶は我々を自分の図書館に連れて行った。大正大蔵経以外に数多くの経典と尊像があった。僧侶は2、3のダラニの本をプレゼント

してくれた。これらの本は、我々の図書館にはない。これらは出版されねばならない。その後、我々は、阿闍梨の寺院へ向かった。奇妙なカーリー女神の像があった。その前に木でできた100の小さな升があって、そこにそれぞれ印刷してある紙が置いてあった。それとともにいくつかの竹の平たい棒が入った竹の筒があった。筒を振ると、筒の中から竹の平たい棒が落ちてくる。その棒に書いてある番号を読んで、升の中から印刷してある紙を取り出して優婆塞に渡す。紙に印刷してあるお言葉のとおりに行動すれば、優婆塞の苦しみがなくなる。この場所に2、3の年配の女性が立っていた。彼女たちは我々に敬意を表し、合掌しながら挨拶してくれた。外に出ると、菩提樹を見ることができた。すぐ近くの中庭に、高い石の台の上に自然のでこぼこの石が置かれていた。これは、中国の美を増幅させるシンボルである。

その後、寝込んでいる年配の僧侶の部屋に向かった。ベッドは規則〔戒律?〕通り木の板でできていた。その上に薄い布が敷かれていた。「あなたの病の体に、このベッドは固いでしょう」と私は尋ねた。私がそう言うや否や、その年配の僧侶は自分のベッドの上に結跏趺坐で座り、「もしベッドが柔らかければ結跏趺坐が正しくできない」と言った。[p.10] 結跏趺坐を見ておおいに感動した。この結跏趺坐は広州に来る途中、ジャワに住む労働者のリーダーと教授たちがやっているのを見た。彼らは労働者の指導者たちのグループのメンバーとして北京に行っていた。座のポーズ (āsana) とインド、インド的なものは密接に結びついている。

「私たちはあなたのために何ができますか?」と尋ねた。すると、「我々にインドから本を送ってください」との答えをもらった。これは中国の伝統である。彼に本を送ろう。どんな本を? ヨーガの本、サンスクリット語を学習するための本、インドの巡礼地の本など……

6時半に寺院から外に出た。15階建ての国際旅行センターの12階にある自分の部屋で少し休憩を取ろうと考えていたが、休憩どころではなくなった。寺院の入り口〔にある商店の〕老いた女店主が、菩提樹の葉が描かれた巻物を渡してくれたのである。その非常に驚くべきことが、今日一日の疲れを忘れさせてくれた。1つの巻物には、18の菩提樹の葉が描かれており、その上に18の絵が描かれていた。価格は2元、つまり4.5ルピーであった。これらは、十八羅漢の絵だろうか。これらが羅漢であるかどうかは、帰国後時間をかけて調べ、判断し

よう。今は、これらの絵の美しさを味わうだけで十分である。この「眼の祭り」はすばらしい。近くに中から作られた¹³瓶 (kamaṇḍalu) がぶら下がっている。これももらおう。中国で瓶を見ると、インドが見えたように思える。この器は、機械の時代よりもさらに前、鉄器時代より前のものである。この器は思想家と関係している。聖者と牟尼、苦行者と関係している。彼らは、より高い存在を目指すために、人間として生まれたことを利用していた。人間的な幸せを楽しむことが、人間として生まれる意義ではないと彼らは考えていた。身体的な苦行をおこない、感覚器官を制御し、人間の心理的・知的・精神的力を発展させて、世界の源であり世界の支配者である神と一体化するために、感覚器官から生じる安楽を、彼らは捨てていた。瓶は、彼らにとってのシンボルではないだろうか。どうだろう。広州市の六榕寺通にある六榕寺の古い門の前にあるちっほけな瓶が、何百年の歴史を一瞬で物語っていた。少しお金を出して、瓶を手に入れた。そして、かがやいたガラスで覆われている9階建ての寺院¹⁴の絵を持って車に乗り込んだ。

国際旅行センターに到着し、手と顔を洗い、2～4個の酸っぱいオレンジを絞ったジュースを飲んで、再び舟による観光のために出かけた。下に降りながら、ロシア(ソ連)の代表者グループを見た。彼らも今夜、私たちが乗るのと同じ列車で北京に出発する。彼らと会話しようとしたが、うまくいかなかった。トラベラーズチェックの両替もできなかった。今日は日曜日である。すべての銀行が閉まっている。いずれにしても、夕方の7時を過ぎている。香港にいれば、私たちはホテルでも両替が可能であった。今私たちには4元しか残っていない。[p.11] そして、もし六榕寺の僧侶が私たちの4元の布施を受け取っていれば、私たちは一文無しになっていたであろう。

ちょうど7時15分に、私たちは舟に乗り込んだ。1時間、珠江を回遊した。川に、輝き、きらきらし、ゆらゆらし、波に乗った何千もの灯明の光が光の柱を形成していて、非常に美しかった。珠江は中国の第3の大河である。第1は黄河、第2は揚子江である。

広州から海はそんなに遠くなかった。モーターボートで海岸に至るためには2時間かかる。この川の上にあの有名な橋がある。この橋が国民党により大砲で破壊されたことにより、共産主義者の南下がすこし遅れた。

広州から北京に行くには2つの方法があった。1つは列車、もう1つは飛行

機である。列車では3泊3日かかるが、飛行機ならば1日で行ける。私たちの中国の友人は、私たちが飛行機で行くことを希望した。しかし、彼らのその希望の強さと同じくらい、私たちは列車で行きたかった。私たちは友人たちに決めるのを任せたかったが、彼らが結局私たちに決めるのを任せたため、旅の苦勞を考えず、列車で行くことに決めた。私たちは中国を見るために来ていた。飛行機では雲しか見えないでしょう。中国の大地が2、3マイル上昇し、私たちに自分の姿を、どうやって見せるのでしょうか。そして、人々、畑、家、動物、鳥、工場、川、疎水、人々のふるまい、これらすべてを私たちは飛行機の上からどうやって見るのでしょうか。一気に北京に到着するよりも、3泊3日かけて中国の状況について紹介を受けた方が、よりよい成果があるでしょう。そんな様々な考えが頭に浮かんだ。

8時20分に自分の1201、1202番の部屋に入った。8時45分に食事を終えた。1時間ほど寝た。10時に食器を片付けるためにウエイターがやって来た。彼らに食器を渡し、また横になった。11時に起きて、駅に向かった。列車はとても長かった。片方にロシア (ソ連) の代表者グループ、もう片方に私たちのグループがいた。私たちを一緒にコンパートメントにすることはできなかったのだろうか。いや、できない。場所は以前から決められていた。変更の願いをすることは、適切ではないと思われた。

広州の最も有名な科学者と中国の国立科学院 (rāṣṭriya vijñāna-maṇḍala) の代表者である柯麟¹⁵医師が我々に会いに来た。彼はここ〔広州〕にある医学大学の学長である。今年この大学から300人の学生が卒業する。柯麟医師によれば、3つの5カ年計画で、必要とされる医者¹⁵の数が揃うとのことである。中国では医者¹⁵がとても必要であるとされている。[p.12] 医療部門と公共衛生部門は、共産主義政府の重要な部門である。これらの役人たちは、あらゆるところに存在している。柯麟医師は中印友好の強い支持者である。彼は、眼の治療の分野で、中国は昔インドから多くのことを学んだと教えてくれた。私がより詳しく質問すると、彼は、「このことについての調査は北京でおこなわれている。そして、中印の科学技術上の交流についての資料は、北京以外で入手するのが困難である」と述べた。

列車の服務員は敷き布団と掛け布団を持って来た。12時になっていた。横になったとたん、眠りに落ちてしまった。

26日の朝、途中に大きな川があった。この川の名前は揚子江である。この川の上には橋が架かっていなかった。1、2年後に橋が架かることを期待している。我々は降りざるをえなかった。ここでも政府の役人たちが我々を歓迎するためにやって来た。2、4時間とどまって、休憩所でシャワーなどを済ませた。町を散策し、そして再び船に乗って川を渡り、新しい〔別の〕列車に乗った。

27日の夕方4時30分に、中国の一千年の歴史を持つ首都・北京に到着した。インド大使館からゴーヴァルダン (Govardhan) 氏が迎えに来ていた。アグラヴァール (Agraval) 氏も一緒であった。中国側の歓迎者もいた。

注

- 1 不明。ただし、当時の駐インド中国大使は袁仲賢 (1904-1957) なので、大使ではないことは明らかである。
- 2 サンスクリット語に長けた者に与えられる称号の一つ。
- 3 博物館のことを指すとおもわれる。
- 4 原文は「[tūmṭi]」。
- 5 農民運動講習所旧跡と思われる。
- 6 黄花岗七十二烈士墓のことと思われる。
- 7 網状の袋のことを指すか。
- 8 八角形の形をしているとの描写から、中山記念堂のことと思われる。
- 9 大理石のことか。
- 10 V. S. Apte, *The Student Sanskrit English Dictionary* によれば、kalā は時間の単位であり、1 kalā に1分、48秒、8秒がそれぞれ相当するなどと、さまざまな計算方法があるという (A division of time variously computed; one minute, 48 seconds, or 8 seconds)。いずれにせよ1分以内なので、ここでは kalā を「分」と訳した。
- 11 Avalokiteśvara の女性形。中国では観音菩薩が女性の姿で表現されているため、あえてこのように女性形を記している。
- 12 1898-1990。多方面で才能を発揮した英語詩人。脚本家であり俳優、音楽家でもある。独立後初めて開催されたインド国会の議員を努めた。女流詩人で、ガンディーの補佐役も務めた政治家でもある S. ナーイドゥ (Sarojina Naidu, 1879-1947) の弟。
- 13 原文には bica meṁs se ghaḍā huā とあるが、意味がはっきりしない。
- 14 この寺院は六榕寺のことを指すと思われるが、p. 6では六榕寺のことを「7階建て」と表現している。9階は7階の誤りか。

- 15 1900-1991。広東省海豊県出身の医学教育者。1926年広東公医大学を卒業。卒業前に中国共産党党员となり、医師として生活する傍ら、広州、武漢、上海、香港、廈門で密かに革命運動に従事した活動家の側面も持つ。デーヴァナーガリー文字による Kao Lin という音写とその名の読みがほぼ一致すること、当時広州にあった中山医学院（現在の中山大学北キャンパス）の学長であったことが本文の記述と一致することから、柯麟であると同定した。